

五臓と五情

内臓のはたらきで基本となるのは肝、心、脾、肺、腎の五臓です。心の動きは、「怒る」「喜ぶ(笑う)」「思いわずらう(慮る)」「悲しむ(憂う)」「恐れる(驚く)」の五つに分け、「五情」とよびます(喜、怒、憂、思、悲、驚、恐の「七情」ともいいます)。

内臓の機能に異変が起きると、心の動きもその影響をうけ、特有の感情となって現れます。これを「五臓の変動は五情を生む」といいます。

つまり肝の機能が著しく変動すれば怒を、心は喜を、脾は思を、肺は悲を、腎は恐の感情を、それぞれ生じさせるとみえます。ですから特定の臓器の変調は、特有の情動や、精神状態を生じやすくさせるわけです。

他方、感情(「五情」)が激しく動けば、関係しあう臓を傷つけて、その臓に病変を生じさせます。心が不安定になると病気の原因になりやすいわけです。

両者の関係を具体的にいえば、疲労などで肝の機能がそこなわれるとイライラして怒りっぽくなる、逆に怒りすぎると肝をいためやすい。胃腸など消化器(脾)が弱るとクヨクヨ思いわずらい、その反対は前記の中学生の話となります。肺結核で呼吸器(肺)をわずらった患者が、悲しみに沈みこみがちになるありさまは、「不如婦」(徳富蘆花)の「浪子」など、ひと昔前の小説の主人公によく登場したものです。泌尿器や生殖器、婦人科疾患など、はり・きゅうでいう「腎」をわずらうと、ものごとに驚きやすくなったり、ちょっとしたことにビクビクしたりすることがよくあります。

このように、患者の精神状態に不安定さがあるときは、「五情」のどれにあたるかを考え、どの内臓の変調と関係しているかをさぐり、また内臓の変調を知ること、いまどのような心の状態にあるかを推察します。

「心の病い」と「体の病い」を切りはなさないで治療に生かすのです。

